亂五倫、朋友盡禮儀、旦暮慮忠純、古謂君雖以不君、臣不可不臣、

右の御詩を綱條公へ御殘し置せ給ひて、そのまゝ御發駕あそばし、○略中

一西山公御隱居後、常々御はなしあそばされ候は、世の人末期に辭世と申候て、詩歌など致候、去ながら病氣の品により、さやうの事ならざるもあるべく候、我は隱居して江戸を立候あした、中將に殘し置候詩御詩出前が辭世なりと仰られ候、此故に御病中に御辭世あそばされざるものと、人みな申あへり、

〔泊酒筆話〕一縣居翁の門人に平田保通稱服部安五郎といふ人ありけり、○略中此人常にいひしは、近來のひとの辭世の歌といふものを見きくに、みな禪家のさとりにて、心には何にさとれる事なき輩も、辭世の詩歌とだにいへば、みな口ぎよきことのみなり、いかでこの世を別るゝきはに至りて、さる人ばかりはあらむ、常に題をまうけてよみ出だすうたこそ、まれ〳〵には心にもあらぬ言をつみいでめ、それさへいかにぞやおぼゆるを、まして命をはらむきはに臨みて、心にもあらぬことといひ出づるは、なかなかになまさとりなる心あさゝの見ゆるぞかし、在五中將の、きのふけふとはおもはざりしを、など讀まれたるこそ、まことにさることなれなど、人に向ひては、常にかたりけるが、かねてや思ひまうけけむ、又は其をりにのぞみてや心にうかびけむ、病いとあつしうなりて、

死雜載

我はもよをはりなるべしいざ兒どもちかくよりませよく見て死なむ、とよみて、身まかりにけり、世のすねものなりけむことおもひやるべし、

〔大鏡八〕大かた延喜帝、○略中さてわれいかでか、ふづきながつきに、○原作に據一本改と。しに。せじ、すまひのせち、九日のせちの留らんが、くちおしきにとおほせられけれど、九月にうせさせ給ひて、九日のせちは、それよりとまりたる也、